ささげものを盛るうつわ　－装飾付須恵器を観察する－

ここにあるのは、高杯形器台と子持器台と呼ばれる須恵器です。

奈文研とゆかりのある、奈良市内の所蔵家がおもちで、昨年所蔵品の年代や考古資料としての価値について相談を受け、調査をおこないました。出土地は不明ですが、考古学的な所見から、どちらも古墳時代後期、横穴式石室への埋葬にともなう葬送儀礼で用いたうつわであると考えられます。ほぼ完全な形である点は、資料的価値が高く、表面を波状文や、長方形や三角形の透孔で飾る様子も良く観察できます。

特に、子持器台は装飾性の高い須恵器の一つで、「親器」と呼ばれる台の上に、「子器」と呼ばれる、小さなうつわを付けています。この器台の子器は、中央に短頸壺、周囲に杯と広口小壺が取り付きます。杯と短頸壺には蓋が付き、蓋をかぶせた状態で焼かれたこともわかりました。

さらに、今回の調査では、高エネルギーＸ線ＣＴを用いて詳細な観察をおこない、子器と親器の詳細な作り方等を調べることができました。

ただし、残念なことに、うつわの中にささげものを入れた痕跡はみつかりませんでした。

奈良県内では、烏土塚古墳で５点の子持器台が出土していますが、出土例はそれほど多くありません。

では、これらはどこで作られ、どの地で使われたのでしょうか。

今後、さらなる分析を進めていきます。

（都城発掘調査部　松永 悦枝）

子持器台（写真は原寸の 50％）
焼成時の痕跡等から、中央と斜め右上方の蓋は本来組み合わないことがわかった。

器台の高さ：高杯形器台（左）約 50 ㎝
子持器台（右）約 40 ㎝（蓋をかぶせた状態）

湯舟坂2号墳プロジェクト

近年、遺跡の再発掘や遺物を再整理する事例をみかけるようになりましたが、このプロジェクトは文化財を地域活性化の資源として捉えるものです。

1981年、京都府京丹後市久美浜町に所在する湯舟坂２号墳で発掘調査がおこなわれ、丹後半島最大級の横穴式石室をもつ円墳であることが判明し、金銅装双龍環頭大刀を含む豊富な副葬品が出土しました。その２年後、遺跡は京都府指定史跡、遺物は国の重要文化財となり保護されることになりました。

それから40年。京都府立大学の諫早直人准教授（奈文研客員研究員）主導の本事業が同大地域貢献型特別研究（ACTR）に採択されました。目標は、市教育委員会・府立丹後郷土資料館および地元自治会と協働して最新の研究動向を反映させ、遺跡の新たな価値を見出すことです。私は高精細写真撮影の面で協力し、「正確かつ情報量の多い写真記録」を研究者はもちろん、地元でも利用し易い高品質な遺構・遺物写真として整備するお手伝いをしました。

７月24日、コロナ禍の合間を縫って久美浜庁舎で成果報告会がおこなわれ、広報資料印刷物は区長さんや府立大生がデザインする等、文字通りの協働イベントになりました。４Kディスプレイによる高精細画像解説や大きく引き伸ばした写真パネルを用いた学生解説とともに、私にも「再撮と新撮」のお題で発表の場が与えられ、実物を超えそうな迫力と親しみやすさを両立させる報告会となり、好評でした。

発掘40周年記念事業やさらなる価値発見を目指す調査が今後も計画されていますが、観光目的ではなく現地の方々が地域の魅力を感じられる資源化を目指している点がミソです。文化財が地元で生きて育つよう、最新の研究技術で応える取り組みを続けていきたいと思います。　（企画調整部　栗山 雅夫）

巨大な双龍環頭柄頭が目を惹いた写真パネル展示

よみがえった古代のゲーム「かりうち」対戦試合

奈文研では、調査研究の成果を活かし、平城宮跡来訪者に遺跡博物館ならではの体験を提供するための活動をおこなっています。その一つ、古代の遊び「かりうち」を現代のゲームとしてよみがえらせるプロジェクトの始動を「奈文研ニュースNo.80」でお伝えしました。「かりうち」とはサイコロの代わりに４本の棒を投げる双六に似たゲームで、2015年に奈文研の研究により盤面の実物が発見されました。

その後、「かりうち」の道具やルールの検討を重ね、ついにこの秋、2021年11月３日、朱雀門ひろばにて、「よみがえった古代のゲーム「かりうち」対戦試合」を平城宮跡管理センターとの共催、NPO平城宮跡サポートネットワークの協力で実施しました。

一般応募８チームでのトーナメント制とし、試合では、この日のために改良した折り畳み式の板紙による盤面、吉野杉を材料に使ったコマ・「かり」による「かりうち」キットを用いました。さらに、決勝戦では、盤面に出土遺物から再現した土器、木の枝を削り再現した「かり」、コマとしての小石を用い、奈良時代をよりリアルに体験いただきました。

当日は晴天に恵まれ、朱雀門ひろばには奈文研職員・NPOメンバーらが扮する“天平人”も応援にかけつけました。初めての参加チームも飲み込み早く、「おんぶ」や「どんでん返し」等の技を駆使し、時には祈りを込めて「かり」を投げ、試合運びに一喜一憂する声の上がる楽しい時間となりました。

奈文研は今後も「かりうち」をより広く皆様に楽しんでいただくため、取り組みを進めてまいります。引き続きの応援をよろしくお願いいたします！

（文化遺産部　高橋 知奈津）

朱雀門ひろばの「かりうち」対戦試合の様子